霧島市立医師会医療センター　　No. 193　平成 27 年 1 月

薬剤部 DI ニュース

●インフルエンザ関連について●

Q.1　抗インフルエンザ薬にはどのようなものがありますか？

A.1　現在、抗インフルエンザ薬は以下 4 種類のノイラミニダーゼ阻害薬が上市されています（表 1)。2014 年春に条件付きで承認されたファビピラビル(アビガン®)は、ノイラミニダーゼ阻害薬に耐性のウイルスが流行した際に有効と考えられています。

表 1　抗インフルエンザ薬の用法・用量

製剤名	治療	予防	腎機能低下時（※治療）
オセルタミビル (タミフル®)	成人：1 日 2 回　1 回 75mg 小児※1:1 日 2 回　1 回 2mg/kg 5 日間の服用励行	成人:1 日 1 回　1 回 75mg 小児:1 日 1 回　1 回 2mg/kg 10 日間	30＜Ccr：1 回 75mg　1 日 2 回 10＜Ccr≦30：1 回 75mg　1 日 1 回 Ccr≦10：推奨用量は確立していない
ザナミビル (リレンザ®)	成人：1 日 2 回　1 回 10mg (5mg ブリスターを 2 個) 小児：成人と同じ 5 日間の吸入励行	成人:1 日 1 回　1 回 10mg (5mg ブリスターを 2 個) 小児：成人と同じ 10 日間	減量の必要なし
ラニナミビル (イナビル®)	成人：40mg を単回 (20mg 容器を 2 個) 小児：10 歳未満 20mg を単回 10 歳以上 40mg を単回	成人・10 歳以上の小児： 1 日 1 回　20mg を 2 日間 (10 歳未満の小児への 2 日間投与の経験なし)	減量の必要なし
ペラミビル (ラピアクタ®)	成人：1 日 1 回 300mg 重症化するおそれのある患者には 1 日 1 回 600mg、症状に応じて連日反復投与可 小児：1 日 1 回 10mg/kg	適応なし	50≦Ccr：300mg（600mg） 30≦Ccr＜50：100mg（200mg） 10≦Ccr＜30：50mg（100mg） ※かっこ内は重症化するおそれのある場合

※1 10 歳以上には、オセルタミビルの使用を原則として差し控え、吸入タイプのザナミビルやラニナビルを推奨

Q.2　インフルエンザにかからないためにはどうすればよいですか？

A.2　流行前のワクチン接種、飛沫感染対策としての咳エチケット（マスク着用)、外出後の手洗い等、適度な湿度の保持、十分な休養とバランスのとれた栄養摂取、人混みや繁華街への外出を控える、など日常生活に気を配ることが大切です。

・ハイリスク群の高齢者には…

インフルエンザを発症した場合、二次感染による肺炎を引き起こす可能性があり、「インフルエンザワクチンとともに肺炎球菌ワクチンの接種を勧めることが重要」という意見もあります。

（2014 年 10 月以降、高齢者に対する肺炎球菌ワクチンが定期予防接種の対象となっています）

***Q.3*　妊婦・授乳婦がインフルエンザに感染した場合の使用薬剤は？**

A.3

妊婦：可及的早期に**オセルタミビル**または**ザナミビル**を開始。

妊娠自体がインフルエンザ合併症の危険因子なので、妊婦のインフルエンザ薬物治療・予防は優先的に考えられるべきです。

・国立成育医療センター等によるオセルタミビル使用の研究報告（2009 年 9 月～11 月）
妊娠中にオセルタミビルの治療を受けた 90 例の妊婦についてフォローアップを実施したところ、出生児に形態異常が認められた例は 1 例。この頻度は一般妊娠集団でみられる形態異常児出生頻度（1～3%）内です。

・リレンザは吸入で使用され局所で作用するため、母親の血中に移行する量もごくわずかであり、胎児に重大な影響を及ぼす可能性は低いと考えられます。

授乳婦：**オセルタミビル**または**ザナミビル**を使用。

オセルタミビル、ザナミビル使用中でも授乳は継続可能です※2。

※2 添付文書では授乳を避けさせるとなっていますが、欧米では「母乳中への移行はわずかで、オセルタミビルの 1 歳未満への投与量に満たない」とのデータを根拠に授乳の継続を可能としています。

***Q.4*　感染している（感染した）母親が授乳することは可能ですか？**

A.4　原則、母乳栄養を行います。以下が勧められます。

・母親がインフルエンザを発症し重症でケアが不能な場合には、搾母乳を健康な第 3 者に与えてもらう。

・母親が児をケア可能な状況であれば、マスク着用・清潔ガウン着用としっかりした手洗いを厳守すれば（飛沫・接触感染予防対策）、直接母乳を与えてもよい。

・母親がオセルタミビル・ザナミビルなどの投与を受けている期間でも母乳を与えてもよいが、搾母乳とするか、直接母乳とするかは、飛沫感染の可能性を考慮し発症している母親の状態により判断する。

（薬剤部　田中）